

錫蘭(スリランカ) 追懐記



音喜多 卓嗣 (おときた たくし)

前・在スリランカ日本国大使館書記官
国土交通省北海道局開発計画課上席開発計画専門官

1999年総理府北海道開発庁北海道開発局入局。2015年3月～18年3月まで、在スリランカ日本国大使館の書記官として政府開発援助（ODA）案件に関する企画立案、当地に進出する日本企業のサポートなどを担当。4月から現職。

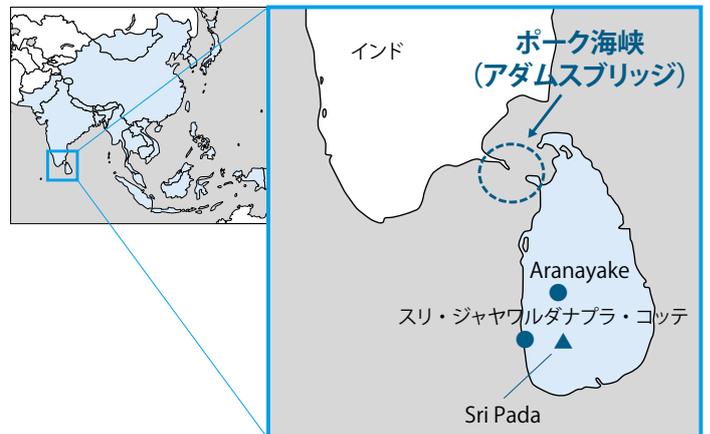
「Hello, Otokita-san!」と私の携帯電話に連絡してくるのは、日本に行った経験のあるスリランカ人が連絡してきたとき。私が会ったスリランカ政府の多くの方は日本に何らかの形で訪問したことがあり、親しみを込めて「San」付けで私を呼んでくれる。「Mr. Otokita!」と呼びかけるのは大使館のスタッフや日本に行ったことがないスリランカ政府関係者。

このほか、親日的な団体やNGOなどの知らない人からも同じように呼びかけられ、そして相談などを受けていました。電話が鳴るたび、今回は何の要件だ? と思いつつ、頻繁に鳴り響く電話には離任する最後の瞬間まで緊張し続けました。

国土交通省北海道開発局から出向し、常夏の国スリランカで日本政府の外交官として3年間勤務してきました。仕事の担当は主にスリランカ国内のインフラ整備支援等に係る開発協力です。日本で過ごす3年間と外国で過ごす3年間の時間の長さには違いはありませんが、スリランカでは日々新しい出来事があり、生活環境は急速な経済発展と共に変化があり、毎日が刺激的な生活でした。最近では日本からの旅行者が増えて徐々に知られてきているのかと思いますが、日本人が持つスリランカの一般的なイメージとその実際、仕事や生活の中で見聞きしたこと、それから北海道との関わりについてほんの少しだけ紹介させていただきます。

首都名

一時帰国等で日本に戻った時、友人等にスリランカに住んでいると言うと、多くの人はスリランカのイメージとして、首都名が長い、紅茶、インドの近くなどと反応する方が多かったです。



スリランカ 位置図

さらに2009年までは内戦が続いており、このことは社会の教科書にも掲載されていたので、危なくないの？と言ってくれる方もいました。

まず首都名についてです。高校生の時に必死に覚えた、長い首都名「スリジャヤワルダナプラコッテ」。正確には「スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ (Sri Jayawardenepura Kotte)」となります。意味は、「スリ (聖なる)・ジャヤワルダナ (第2代大統領名)・プラ (街)・コッテ (元々の街の名前)」です。多くの大使館が大都市コロンボにありますが、首都はその隣町で、10kmほど内陸に位置しており、国会の他、主要な官庁がコロンボ市内から移されています。行政機能を新しい首都に移転させることは当然のことだと思いますが、ここで問題です。

スリランカには省庁はいくつあるのでしょうか (閣僚は何人いるのでしょうか)？正解は42人です*1。このほかに国務大臣や副大臣がいて、国会議員の議席数が225なので、総議員数の約2割が閣僚、国務大臣、副大臣を含めた政府要職に就かれているのが全体の約1/3となります。

このうち私の仕事に関係するのは、省庁再編で変動はあるものの10省庁前後でしょうか。省庁毎の業務に重複するようなどころがあったり、一つの事案に対する見解が省庁間で大きく異なったりするなど、対応するのが非常に難しかったです。

紅茶→プランテーション→災害管理

次に紅茶。日本でよく目にする紅茶の多くにスリランカの茶葉が使われています。スリランカでは紅茶のほか、緑茶や高級茶葉として有名な白茶 (White Tea) も栽培されており、スリランカの重要な輸出品



左二つがWhite Tea (Golden TipsとSilver Tips)。見た目は色が非常に薄いのが特徴

※1 2018年5月14日時点。

目となっております。紅茶は日本のお茶園のように水はけが良い傾斜地で栽培されておりますが、その経営はプランテーション農園となっております。

ここでも私の仕事に関係しております。それが災害管理。前述のとおり、紅茶を栽培しているのが傾斜地であり、気候変動が影響しているのかどうか分かりませんが近年は激しい集中豪雨が度々起こり、それによりプランテーション農園では土砂災害が発生しています。プランテーション農園内には作業する方が住んでおり、土砂災害に巻き込まれるケースも発生しています。

私が勤務していた3年間で幾度か大規模な土砂崩れや洪水が発生した自然災害がありましたが、日本政府は他国と比べるといつも早く緊急援助物資を届け、さらに国際緊急援助隊を派遣していました。

幸い、コロンボにある日本大使館はスリランカ政府の災害管理省に隣接していたことから、一刻を争う災害発生時は徒歩で災害管理省に出向くこともありました。

大使館としては、被災状況や援助の要否の確認、緊急援助物資の引き渡しや日本の国際緊急援助隊が円滑に活動できるようスリランカ政府と調整したほか、NGO (非政府組織) を通じて地域住民に対して直接援助物資を提供する活動も行います。

このほか、日本らしい防災の取組が根付きつつある事例を紹介します。「自助・共助 (互助)・公助」というのは日本の防災では定着している言葉ですが、特に「共助」については多様な主体が共通した認識の下に連携した取組を進める必要があります。予め災害が起こることを前提に備えをする、或いはその意識をコミュニティ内で共有することが前提となります。

このことについて、スリランカでは日本政府の支援



スリランカ中央部のAranayakeで発生した土砂災害。死者・行方不明者127名の惨事

を受けたNGO「the Asia Pacific Alliance for Disaster Management (A-PAD)」が大きな役割を果たしています。このA-PADが実施していたのは、まずコロombo周辺の大企業に災害時の共助の重要性を説いて、共助の土台となる企業のプラットフォームを構築し、災害時における各企業の役割を決定。災害発生時はA-PADが中心となって各企業が能動的に援助活動を展開し、援助活動終了後はそれぞれの取組を検証するというものです。

実際、2017年5月に首都やコロomboがある西部州や南部州、サバラガムワ州で発生した大洪水では、被災者に対して様々な支援物資を民間企業が拠出し、被災地に届けられました。

近年は毎年のように大規模な自然災害が発生しておりますが、ハード整備による対策は時間も資金も要することから、総合的な防災力を高める取組として民間企業が主体的に参画して共助の力を高めていく取組が根付いてもらいたいところです。



緊急援助物資をスリランカ政府に引渡している様子。左からヤーパー災害管理大臣、菅沼大使、カルナナヤケ外務大臣、田中JICAスリランカ事務所長



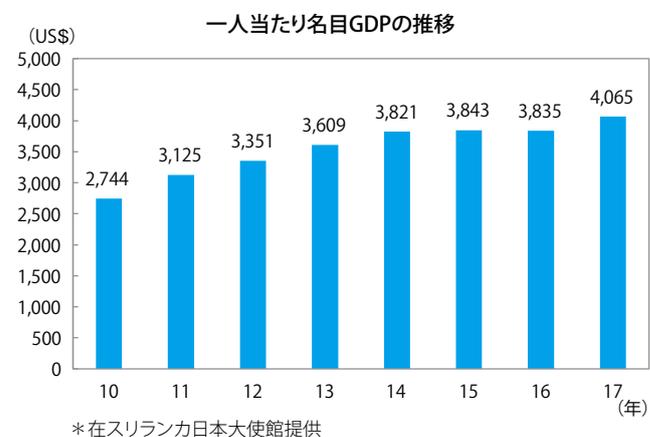
A-PAD主催で被災者支援活動の検証を行っている様子

GDP→共助

若干話は逸れますが、1人当たりGDPと生命保険浸透率には相関関係があると言われているのを聞いたことがあります。2017年のスリランカGDPは870億米ドル（≒約9兆69百億円、北海道の約半分（2015年）1米ドル=111円で換算）、1人当たりGDPは4,065米ドル。

生命保険浸透率が大きく伸びる1人当たりGDPのキックポイントについては土地柄によって違うようですが、中所得国^{※2}から中進国^{※3}になるころには伸びているようです。スリランカは現在中進国入りしたところなので、生命に関わるような事故、事件、災害が起きた場合の備えに対する意識が根付き始めているのかもしれない。

もちろん中進国入りしたと言っても所得格差は大きいのが開発途上国では通例ですので、所得が高いであろう民間企業に、生命の危険に関連する災害時における共助の役割を担ってもらうのは有効であろうと思われます。



※2 US\$1,916以上US\$3,975以下（国連及び世銀の分類）。

※3 US\$3,976以上US\$6,925以下（同上）。

また、当然のことながら、スリランカ製品の輸出先の多くが欧米であることから、企業側としてはこのような活動をCSR^{※4}として欧米企業に対するアピールポイントになることは間違いありません。

内戦→インド→アダムスブリッジ

学校で聞いたことがあるスリランカについて挙げられるのが内戦、そして政府に対抗していたタミル人反政府組織「タミル・イーラム解放の虎」(Liberation Tigers of Tamil Eelam, LTTE)ではないでしょうか。1983年から始まったこの内戦、2009年5月に終結して以降、テロ事件は発生しておらず国内の治安情勢は安定しています。LTTEの拠点があり、激しく戦闘が行われたスリランカ北部地域も今は自由に往来することができ、外国人観光客は少しずつ増えています。

私もそれらの地域を観光してきましたが、まだあまり知られていない地域ですから、スリランカのことを気に入った方は次の訪問地として検討しても良いかもしれません。まだまだ観光地と呼べるようなところは多くありませんが、徐々に地域が発展している様子は感じられると思います。反政府組織の名称に付いている「タミル」というのはタミル語を話す人々のことですが、スリランカでは北部地域、インドでは南部地域に多く住んでいます。

スリランカの印象として「インドの近く」というのは、地理的に近い、というイメージだと思いますが、タミル人が多くスリランカにも住んでいることから、文化的にもインドとは近いということです。真偽のほどは確かではありませんが、インドとスリランカの間のパーク海峡を昔は歩いて渡ることができたとか。

この場所は石灰岩でできた砂州と浅瀬になっており“アダムスブリッジ”と呼ばれています。この世で最初の人間であるアダムが、スリランカの聖地アダムスピーク^{※5}に行く時に渡ったという伝説に基づいてイギリスが名付けたようです。

※4 Corporate Social Responsibilityの略。企業が倫理的観点から事業活動を通じて、自主的（ボランティア）に社会に貢献する責任のこと。

※5 スリランカ中央部のサバラガムワ州にあり、ラトゥナブラ北方にそびえる標高2,238mの山。スリー・パーダ（Sri Pada）やサマナラ・カンダ（シンハラ語：蝶の山の意）とも呼ばれ、世界自然遺産「スリランカの中央高地」を構成している。

メガポリス計画→プロジェクト

さて、地域開発官庁から出向した職員として、触れなければならないのがスリランカの地域開発計画です。2016年1月に公表された『Western Region Megapolis Mater Plan』は当初コロンボや首都がある西部州の地域開発計画と見なされていましたが、その後まとめられた『Projects Identification Report Western Region Megapolis Planning Project』では西部州に接続する高速道路整備事業も追加されています。

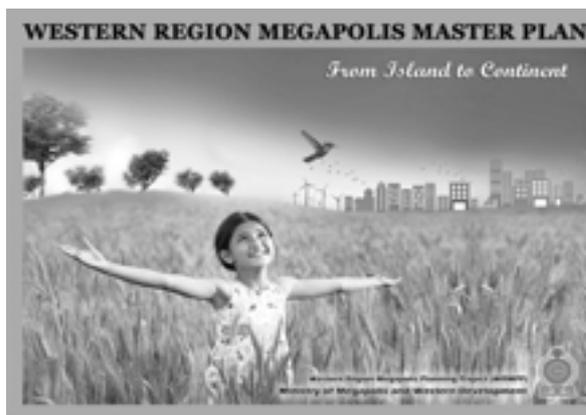
この計画を推進するためのプロジェクト数は全部で170、総事業費は約11兆円。高速道路網整備や港湾、空港、都市開発、上下水道やゴミ処理などの環境衛生など多岐にわたり、概ね2020年までに完成させるという壮大な計画です。

この計画はシンガポールの都市計画系コンサルタント会社によって取りまとめられています。スリランカの現首相はアジアで有数の経済大国に発展したシンガポールを参考にして、自国を発展させたいという思いが強く、親交のあるシンガポール首相から国づくりのアドバイスを受けたとされています。

そして、この計画を推進する中核となる組織がメガポリス西部開発省（Ministry of Megapolis and Western Region、以下「メガポリス省」）で、この組織は2015年9月の省庁再編で誕生した新しい政府組織です。

メガポリス省はスリランカ政府42省のうちの一つで、メガポリス計画の推進がメイン業務となっていますが、他省が進めるメガポリス・プロジェクトの進捗管理も行っています（例えば高速道路整備はハイウェイ道路開発省が所掌）。

プロジェクトの財源ですが、2017年のスリランカ政府の一般歳出は2兆6582億スリランカルピー（≒1.9兆



西部地域メガポリス・マスタープランの表紙

円)なので、これらのプロジェクトを進めるための資金をスリランカ政府予算だけで賄うことはできません。そこで不足する資金をどのように補うかという点、国際機関や各国ドナーから借款により資金提供を受けるか、PPP(官民パートナーシップ)により民間資金を活用するかということになります。

日本政府はJICAを通じてプロジェクト実施に必要な資金を円借款で供与しているほか、日本の民間資金を使う新しいタイプの資金提供を提案しています。次にプロジェクトの実施体制です。どのプロジェクトも共通で言えることですが、外部から専門職員を集めてPMU(Project Management Unit)を設置します。

PMUは恒久的な組織ではなく、またスタッフもプロジェクト期間に限っているため、プロジェクト終了と同時に解散します。一見、優秀な外部リソースを活用でき、時限的な組織であることから効率的なように見えるかもしれませんが、外国人技術者を雇った場合に事業完了後に経験等が引き継がれなかったり、省庁再編が起きた場合はプロジェクト実施省庁が不明になったりと、プロジェクト完了後に問題が発生するとなかなか解決されないといった弊害があります。

メガポリス計画には日本政府、企業が関わっているプロジェクトがいくつかありますが、それらのプロジェクトが少しでも早く、そして安全に効果を発現できるようにすることが私の仕事の一つでした。

普段の生活

普段の生活についても少しだけ紹介します。現地へ赴任するときは、日本での生活と同じように家族と一緒にいる人、単身赴任の人、独身の人に分類されます。必ず家族と一緒になければならないということでもありませんが、家族と一緒にいた方が知り合いも多くなるかなと思います。食事でも日本にいたときと同じような形態です。基本的には自炊が多いと思いますが、外食できるところもたくさんありますし、料理を持ち帰ることも可能です。

一般的な食事はスリランカカレーです。スリランカカレーは基本的に一つの食材に様々なスパイス等を入

れて作るカレーです。幾つかのカレーをスリランカのお米に盛り付け、食べる時はそれらのカレーをお米と絡めながら手で食べます。もちろん、外国人は手で食べることに慣れていないためスプーンとフォークを



一般的なスリランカカレー。肉や魚を使ったカレーは辛め

を使って食べています。食堂でもレストランでも店員に頼めば快く提供してくれますよ。スリランカカレーの値段は、コロンボ市内なら一食100~150円くらい、地方だと50~100円くらいでしょうか。スパイスや辛い食べ物が大好きという方は是非お試しください。

このほかにも和食やイタリアン、インドカレー、中華料理、タイ料理、韓国料理、ベトナム料理など選択肢は多岐にわたります。

最近はおしゃれなお店が増えていますが、その中で大使館職員がよく行くカフェの一つが「Embassy」です。店内は西洋風の内装で、シックな落ち着きがあります。食事はワッフルやハンバーガーなどのほか、スリランカビリヤニや東南アジアのナシゴレンもあります。和食レストランは私が在任中に5店舗も新規で増えました。コロンボの和食レストランの老舗「Café Japan」については私を含め在スリランカ日本大使館職員が多く利用していました。メニューは多くありませんがお弁当はほっと一息付ける日本の味です。

北海道とスリランカ

北海道とスリランカの繋がりについても一例を紹介します。北海道のイメージで連想するものの一つが農業ではないでしょうか。特に道東では寒冷な気候を利用した大規模な酪農業が盛んです。その北海道の酪農で生まれた技術がスリランカに導入されております。北海道の酪農業でも過去に問題となっていたのが糞尿等の酪農廃液処理問題。スリランカの中央部は山間部



ヒューエンス社が設置した廃水処理装置の引渡式典の様子。中央左からハリソン地方経済大臣、菅沼大使、設業ヒューエンス社長

となっており、平地と比べると非常に過ごしやすい気候で酪農業が営まれています。

しかしながら、乳製品の製造工場から出される廃水処理が十分ではないことから、環境汚染が大きな問題となっておりました。そこで帯広市の株式会社ヒューエンスは、JICAの中小企業海外展開支援事業を通して同社の独自技術を使った廃水処理施設を整備し、2016年10月にスリランカの国営企業ミルコ社に引き継がれました。引渡式は、菅沼特命全権大使（当時）や同国のハリソン地方経済大臣（当時）、ミルコ社会長等が出席して盛大に行われ、その模様はメディアを通じてスリランカ国内で広く知られるようになりました。

その後、同工場には廃水処理技術の見学に他工場関係者が訪れるなど広がりを見せており、今後のビジネス展開が期待されています。北海道で生まれた技術が寒冷地以外の海外でも通用する好事例だと思います。

おわりに

3年間の滞在期間で、過去にJICA研修で北海道開発局に来たことがある人を訪ねました。ほとんどの人とは面識が無かったのですが、北海道開発局で働いていたと言いつつアポイントを申し入れると快く面会してくれました。研修終了後、自国に戻ってから順調に出世されている方が多く、北海道開発局の国際貢献はまんざらではないなと思われました。

また、今から20年以上前、ロシアに留学していた時の友人にも再会しました。お互いにほとんど変わらぬ



元JICA研修員の自宅を訪問した著者

容姿だったので再会した時はすぐに分かりましたが、考えてみると、使っている言葉が以前と違っていたので違和感がありましたね。今の時代はSNS^{*6}が発達しているので家族や友人、知人と距離が離れていても連絡を取るのは比較的容易です。実際、日本に戻ってきても、スリランカで知り合った人とは頻りに連絡を取っています。その中の一部の人は日本に来たり、また他の人は別の国に移り住んだり、世界各国に散らばっています。

ロシア留学していた当時は、日本に電話するために郵便局に出向き、高い電話料を支払い、僅か数分間だけ通話していましたが、その当時と比べると世界との距離が随分と近くなりました。これから10年、20年後にどこで何をしているか分かりませんが、世界との距離はより一層近くなっていくことでしょう。あるテレビ番組に出てくる登場人物のフレーズではありませんが、ポーっと生きてられませんね。スリランカから戻り、そんなことを感じた今日この頃でした。



1995年、留学先のロシア・ウラジーミル市で著者（上）とスリランカ人の友人（下）

2015年にスリランカで再会した二人

※6 Social Networking Serviceの略でWeb上で社会的ネットワーク（ソーシャル・ネットワーク）を構築可能にするサービス。